

蓑虫山人が夢みた博物館 —資料「廣澤安任自筆草稿」を中心に—

太田原慶子¹⁾

Collecting with Communities: Minomushi Sanjin's Imagined Museum

OTAHARA Keiko

キーワード: 蓑虫山人 廣澤安任 青森県 博物館 六十六庵 長母寺 亀ヶ岡遺跡

はじめに

蓑虫山人(みのむしさんじん:1836-1900年、本稿では蓑虫と述べる)は、幕末から明治時代半ば(19世紀後半)にかけて、九州地方から北東北地方まで旅した画人である。各地の史跡や名勝を訪ね歩き、人々の生活に溶けこみながら様々な出来事や、年中行事などを描いた。また、土器や石器、土偶などの考古資料にも関心を寄せ、自ら遺跡を発掘したりしてそれらを収集・スケッチしたりした。彼には故郷に「六十六庵」⁽²⁾という展示施設を設立するという夢があった。

本稿では、現在の博物館ともいべき施設「六十六庵」に対する基本的な彼の考え方やその活動のあり方、特に本県での状況について、親交のあった廣澤安任(ひろさわやすとう:1830-91年、旧会津藩士、現・三沢市谷地頭に初の民間洋式牧場を開設。本稿では安任と述べる)が残した自筆資料⁽³⁾(廣澤安任草稿/資料1)から考えていくこととする。

蓑虫研究、近年の状況

蓑虫は、天保7(1836)年に美濃(現・岐阜県)で生まれた。本名を土岐源吾という。各地に残されている絵日記によると、文久3年から元治元年(1863-64)頃は九州地方に、明治10年前後から20年代は北東北地方に滞在、その後は東海地方を周遊している。そして、明治33(1900)年に名古屋市長母寺で生涯を閉じた。日常生活の道具を入れた笈を背負い、時には野宿するという放浪生活を支えた画技は、独学で習得したといわれ、滞在した先には多くの絵画資料が残されている。「蓑虫仙人」・「土岐蓑虫」・「六十六庵主(主人)」・「三府七十二県庵主(主人)」等の号を用いた⁽⁴⁾。

彼が旅した時代は、社会が大きく変化した激動の時代であり、新しい文化や生活様式が人々の間に浸透し、一方では受け継がれてきた様々な行事、文化が失われつつあった時代でもあった。旅の記録である一連の絵日記資料群⁽⁵⁾には、各地の史跡や名勝の他に、人々の日常や四季折々の行事などの様子が描かれている。

本県滞在中には、つがる市亀ヶ岡遺跡の発掘も手がけ、土器や石器、土偶などの収集・スケッチにも積極的に取り組んだ。そして、各地を周遊しながら、「六十六庵」の実現に向けた活動を展開していく。

没後120年にあたる令和2(2020)年は、生誕地である岐阜県安八郡安八町や秋田県他ゆかりの地で、展覧会の開催や新発見資料の公開が相次いだ⁽⁶⁾。各地で研究が進んだことにより、作品・業績・足跡について様々な観点から関心が持たれるようになった⁽⁷⁾。

当館では、特別展「蓑虫山人」(1984年)で県内と長母寺に残された資料を紹介し、企画展「蓑虫山人と青森」(2008年)で本県における考古学的業績に焦点を当てた。さらに企画展「新収蔵×再発見2018」(2018年)では、彼が活動の拠点とした旧浪岡町(現・青森市)の旧家に伝わった「浪岡全景図屏風」と「風俗図(年中行事図)屏風」を新収蔵資料として公開した⁽⁸⁾。その後、親交のあった廣澤安任の未発表資料の中に、二人の交流を裏付ける安任の自筆草稿が確認されたため、関連資料の調査を進めてきた。

廣澤安任草稿—資料1(79頁掲載)

資料1は、安任自筆の草稿で、タテ24.5cm、ヨコ17.5cm。右端冒頭部分が切り落とされているために、文字が欠損し判読できない箇所がある。「仙人」とは蓑虫のことであり、二人が直接会って言葉を交わしたことを示す貴重な資料である。ただし、年代を示す記述がない。

安任の末裔でその研究を進めている廣澤春任氏が判読し、概要をまとめている⁽³⁾。春任氏の研究をもとに、原資

1) 青森県立郷土館 主任学芸主査(〒030-0802 青森市本町二丁目8-14)

料に残る安任本人の削除・加筆部分などを考慮し、改めて読み直したものを次に示した。

太字は、筆者が新たに読みかえた部分である。また、文意をわかりやすくするため、適宜改行し、句読点・振り仮名などを付した。内容から大きく二つに分かれる。前半部分を〔A〕、後半部分を〔B〕と分けた。

〔A〕

仙人、己めざめニ暗ル所アリテ古今りくごうヲ一視シ、六号いっかヲ一家トシ、亦人我ヲ沿ハサルモ…（欠損）…ナシ。

只ソノ嗜好トスル所ハ、太古歴史以前ノ器物ヲ発見スルニ在リ。村巷僻所、到处ニ意ヲ注シ、或ハ躬みずから 鋏ヲ執リ、故ニ又よく能発見セリ。

已すでニ発見ス 之ヲ得すなわちレハ 則之ヲ愛シ、之ヲ玩もてあそヒ、一モ古器、二モ古器、飲食携帯ノ具モ皆古器ナリ。然レトモ、愛着亦甚シカラス、到いたるところ 処ニ之ヲ留とどめ、人ノ好このむニ随テ、之ヲわかツ。其レ、之ヲ留ルモノハ、思フニ他年ノ記念ニシテ、ソノ所謂庵ナルモノハ、此ニ外ナラサル也。尚なおモ一器ノ在ル所ハ、仙人思フ我庵彼ニ在リト。敢テ他人ノ宅ヲ問ハサルナリ。故ニ、六十六庵ハ、猶不足ナランノミ。

古いにしえノ人、昔、西行、長明、売茶翁等、皆悟入ヨリ一身ハ羽翼ノ鳥ノ如ク、一物ノ累ナク、而シテ到处すいじやく自ラ垂跡ノ地アリ。思フニ、仙人亦またソノ垂流ナランか。

〔B〕

客冬、予弘前ニ至ル途ニ、仙人ヲ浪岡ニ訪フ。

仙人曰ク、吾ハ十四歳ヨリ出游シ、足跡 殆ほとんどト六十州ニ洽シ。弘前ハ古器ノ出ル所、料ラスモ八ケ年ノ寒暑ヲ経タリ。ソノ間、自ラ諸賢ノ累ヲ為セシ多キヲ知ル事多シ。人ノ累ヲ為スハ好ム所ニ非サリシモ、亦已ムヲ得サルナリ。

因リテ、明春ヲ以テ、一タヒ辞シテ此地ヲ去ラントス。去ルニ臨ミテハ、発見スル所ノ器物ヲ展観ニ供シ、一ハ以テ吾カ多年嗜好、此ニ過サルヲ明ニシ、一ハ以テ永ながくたいりゆう 滞留ノ間、諸賢ノ眷顧けんこヲ辱セシ厚意ニ謝セントス。願ハクハ君、吾ニ代テ予意ヲ表記セヨ云々。

嗚呼、吾ハ文ニ拙ナリ。自ラ己カ意中てんでつヲ点綴スル能ハス。何ソ能ク仙人ノ意ヲ述ンヤ。然レトモ、素ヨリ己ニ其人ヲ奇ナリトス。何ソ文ノ拙ナルヲ以テ辞センヤ、因テ特度じどスル此ノ如シ。来観ノ諸賢以テ如何トスルヤ。

〔A〕は、安任がみた蓑虫の人物評である。

「古今ヲ一視シ、六号ヲ一家トシ」は、蓑虫の物事の考え方の根本を説明していると思われる。「古今」とは時間の流れ、「六号」とは天地、東西南北の全方角を合わせた宇宙全体の広がりof意である。このような世界観を持つ人物、蓑虫が「嗜好とする」(好む)のは、「太古歴史以前ノ器、物ヲ発見スル」ことである。各村々を注意深く歩き、時には自分で鋏をとって掘り起こしたりしたので、よく「物」(古器)を発見することができたという。

そして、それらの「古器」を愛玩し、飲食携帯の日常生活の道具にも用いていた。しかし、彼はそれらの「古器」に深く執着することはなく、各所(滞在先)に留め置き(預け置き)、周囲の人々が好めば(望めば)分け合った。本人が自分の元に留め置いたのは、各地の記念(各地の特色、地域性を表すということだろうか)になるもので、彼が設立を願う「六十六庵」に必要なものであるという。このような蓑虫の生き方は、古の風流人、西行、鴨長明、売茶翁に近いのではないかと、安任は述べる。

ここで記される蓑虫の行動で注目したいのは、次の二点である。自分で発見した「古器」に固執することなく、現地の人々が望めば分けあったという点。たとえ自ら掘り得たものであっても、現地の人々が望めば譲り、現地に残したということであろうか。地域の人々の意向を尊重するという姿勢である。加えてもう一点は、自分のもとに留め置くのは「多年ノ記念」のものであるという、いわば彼自身の収集方針、心構えを掲げている点である。

〔B〕は、蓑虫との面会時の記録である。

（ある年の）冬、安任は弘前に赴く途中、浪岡の蓑虫を訪ねた。

この訪問は、明治19（1886）年の冬と推定される（拙稿「蓑虫山人とゆかりの人々」2016年参照）。この時、蓑虫は、十四歳から放浪の旅に出て、その旅は「六十州」（日本全国）に及んだと語った。

弘前（津軽地方）は「古器ノ出ル所」であったため、思いがけなく「八カ年」という年月を過ごしてしまった。この間、（自分としては）他人に迷惑をかけることは本意ではないが、やむを得ず、多くの人々の世話になった。そのため、明春（明治20年春と推定）には、ここ（弘前）を去ろうと考えている。それで、「（弘前周辺で）発見スル所ノ器物ヲ展観」し、これまでの自分の活動内容も明らかにして、長年の多くの人々の厚意に対して、感謝の意を表したい。この思いを自分に変わって著してほしいと（安任に）頼んだ。収集品の公開は、自分の活動を理解し、協力してくれた人々への感謝を表すためだという。

後半「嗚呼吾ハ文ニ拙ナリ・・・」以降は、蓑虫からの依頼をうけての安任の思いが綴られる。「何ソ能ク仙人ノ意ヲ述ンヤ。素ヨリ已ニ其人ヲ奇ナリトス」・・・自分は、蓑虫の思いを十分に述べることができるだろうか。計り知れない不思議な人物の深い思いを表記することができるのだろうか。

ここで気になるのは、この後「器物ヲ展観」することができたかということと、安任がまとめることになった「予意」（蓑虫の意思）がどのような内容・形式になったのかということであるが、目録などの資料は現在確認されていない⁽⁹⁾。

安任の書「陸奥庵」（長母寺所蔵）との関係—資料2・資料3

蓑虫が最晩年を過ごし、墓所がある長母寺に残されている資料には、安任揮毫の「陸奥庵」（紙本・まくり）がある。「陸奥庵」とは、彼のいう全国六十六カ国のうち、本県分を紹介する旧国名を用いた展示室の呼称のことである。国文学者中村秋香が蓑虫本人の談をまとめた「蓑虫仙人の傳」⁽¹⁰⁾によると、「国名を以て別つべき六十六草庵には、一草庵毎に其国第一流の人に乞ひて扁額の揮毫を得んとす」とある。

安任は、陸奥国を代表する人物として蓑虫から乞われたということになる。また、安任自身も「六十六庵」の趣旨と彼の活動を理解し「陸奥庵」と揮毫した（明治20年）ということになるだろう。その経緯が、本稿でとり上げた草稿（資料1）に記されているとみることができる。

二人の交流について、さらに調査を進めたところ、三沢市先人記念年館に保管されている安任関連資料に蓑虫の描いた土偶図があることが分かった（資料3）。土偶の表・裏・側面を丁寧に観察し描いたもので、彩色もされている。

「六十六庵」で紹介する資料として、本図を示し、揮毫の協力を呼び掛けたのではなかろうか。ここに描かれている土偶の実物と推定されるものは、それぞれ関西大学博物館や東北大学に受け継がれている⁽¹¹⁾。さらに、ほぼ同様の構図で描かれている土偶図は、令和元（2019）年時の長母寺資料調査でも確認することができた。つまり、同じタイプの土偶図が、安任、蓑虫の手元にあったということで、「六十六庵」において「陸奥湾」を構成する中心的な資料になるはずだったに違いない。

今後の課題

昨年度から、江戸と明治という二つの時代を生きた放浪の画人が目指した博物館に焦点をあてた展覧会を企画し、県内外の調査を進めてきた。考古（好古）趣味の収集家として、語られてきた蓑虫が考えた博物館は、各地の自然や歴史を深く理解し、人々の生活になじんだ形での収集活動及びその成果を公開し、共有しようとしたものであったとえよう。それは、地域に根差した博物館のあり方をも示唆しているように思える。その点で、近代博物館の歴史を考えるにあたり、欠くことができない人物といえるのではなかろうか。

本稿では、彼の夢みた博物館である「六十六庵」に結びつく本県での活動について、親交のあった安任の資料から考えてみた。今後も、様々な資料を検証し、収集品の行方も含め、各地に残された資料を丁寧に読み解いていくことが必要と考える。そして、本県分にあたる「陸奥庵」を、今に伝わる収集品や絵画資料で具体的に再現することができれば、彼の目指した博物館を体感することができると思う。

※注

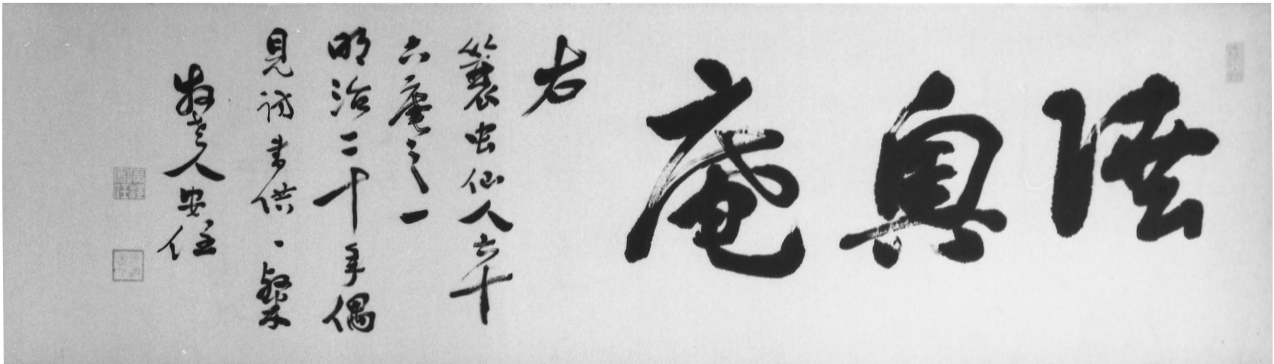
- (2) 「六十六」とは、日本全国のことを指す。古く日本全国を畿内七道の六十六ヶ国と壱岐対馬で六十余州といったことから、蓑虫は各国に一つずつ、六十六の庵（展示室）を設け、自分が主人となって管理運営する展示施設を考えていた。
- (3) 廣澤春任氏によって初めて公開、発表された（『廣澤安任個人史資料探訪』157－164頁／2015年）。筆者は春任氏から情報提供を受けて「研究ノート 蓑虫山人とゆかりの人々」（青森県立郷土館研究紀要第40号／2016年）で、安任と蓑虫の交流を示す貴重な資料として内容の一部を紹介した。現在は、当館資料になっている（2018年、同氏より寄贈された）。
- (4) 「三府七十二県」は、廃藩置県・府県統廃合後の全国行政区分によるもの。三上強二「蓑虫山人の業績と作品」（当館図録『蓑虫山人』1984年）、拙稿「蓑虫山人と青森」（当館図録『蓑虫山人と青森』4－7頁）で、蓑虫の号について述べたうち「三府七十六県庵主」としたのは誤りで、正しくは「三府七十二県庵主」である。
- (5) 現在までに確認されている蓑虫の絵日記は次の通り。九州周遊時代（ハートピア安八蔵、宇佐市個人蔵）、東北周遊時代（長母寺蔵、秋田県立博物館蔵）、本県滞在時代（青森市個人蔵他）、東海地方周遊時代（長母寺蔵）。
- (6) 近年開催された蓑虫に関する展覧会は以下の通りである。
岐阜県安八郡安八町立ハートピア安八・歴史民俗資料館 第30回企画展「放浪の文化人 蓑虫山人」2020年、秋田県立博物館企画展「蓑虫山人 秋田を歩いた漂泊画人」同年、青森県深浦町歴史民俗資料館「黒瀧家所蔵蓑虫山人展」2019年、一関市博物館「蓑虫山人の足跡を訪ねて 一関・平泉一展」2017年。
さらに、2020年11月には、九州大学附属図書館で蓑虫筆の「都府樓圖巻」がデジタル公開された。この資料は、画題・作風とも、本県周遊時代の蓑虫の作風とは全く別の印象を受ける。印章（印文「六十六庵」）も管見の限りでは、本県に残されている資料中に用いられているものはない。九州地方滞在の放浪の旅前半の頃のものか、北東北地方滞在後に描かれたか詳細は不明。いずれにしても年代と描かれた背景の判明が待たれる資料の一つである。
- (7) 多くの先行研究があるが、近年刊行及び発表されたもののうち展覧会図録・解説書以外としては、水野耕嗣「蓑虫山人の『籠庵』の構造とその運搬」（岐阜工業高等専門学校紀要第53号／2018年）、加藤竜「『蓑虫山人画紀行』にみる考古資料の表現について」（秋田県立博物館調査報告資料／2020年）、望月昭秀『蓑虫放浪』（国書刊行会／2020年）がある。
- (8) 「浪岡全景図屏風」は、旧浪岡町（現・青森市浪岡）の風景を描いた四曲屏風。浪岡という土地の歴史を踏まえ独自の視点、地理的な感覚で構成し、風景図としてよくまとめられている。蓑虫は明治15年から20年にかけて、浪岡を拠点に津軽地方各地を周遊した。この間、亀ヶ岡遺跡の発掘を複数回手がけた。拙稿「新収蔵資料紹介 蓑虫山人筆屏風－浪岡全景図屏風を中心に－」（青森県立郷土館研究紀要第41号／2017年）参照。
- (9) 図録『蓑虫展』1984年巻末の略年譜には、明治20年6月に三沢で古代器物展覧会を開き、会記を安任が記すとあるが、根拠となる目録や会記などの資料は見つかっていない。また、明治17年、蓑虫が十和田湖を経て三沢に至り安任を訪ねたとする記述についても、現在、立証できる資料がない。
- (10) 中村秋香『不尽之屋遺稿』（287－293頁）前川文栄閣 明治44（1911）年。中村は静岡県出身の国文学者で、明治20年夏に蓑虫と直接面会し、聞き取った内容を伝記としてまとめる承諾を得たという。
- (11) 図録『蓑虫山人と青森』2008年（84頁）

謝辞

本稿をまとめるにあたり、資料をご恵贈いただいた廣澤春任氏に深く感謝申し上げます。

また、資料調査、利用については名古屋市長母寺様はじめ、以下の各機関・関係者の方々に大変お世話になり、ご協力いただきました。深く感謝申し上げます。

ハートピア安八・歴史民俗資料館、関西大学博物館、東北大学、秋田県立博物館、宇佐市教育委員会、三沢市先人記念館（順不同・敬称は略させていただきました）



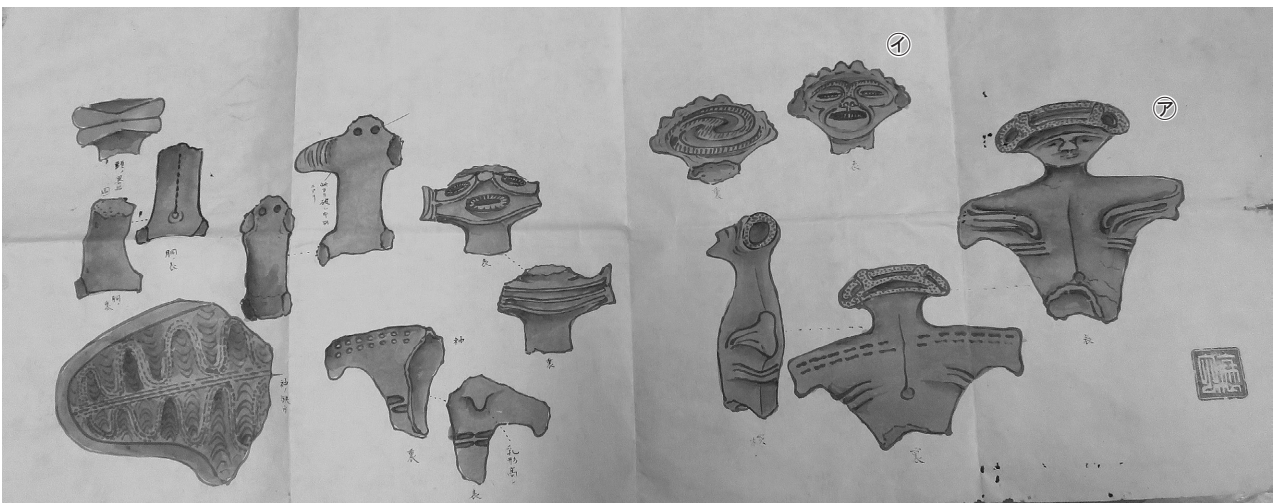
資料2 廣澤安任書「陸奥庵」 明治20年／紙本・まくり 長母寺蔵 タテ 34.5 cm ヨコ 124.5 cm

陸奥庵

右 蓑虫仙人六十六庵之一

明治二十年偶見訪書供、讀 牧老人安任 印

牧老人は安任の号。蓑虫(蓑虫)を「仙人」とよぶ。



資料3 蓑虫が描いた土偶図 個人蔵(三沢市先人記念館寄託)

郷土館図録『蓑虫山人』(1984年)で「原始遺物スケッチ」として掲載後、長く所在不明だったが、近年の調査で廣澤安任関係資料中にあった資料。

実物と推定される土偶は、右端②(正面・背面・側面図)は、関西大学博物館蔵、①(頭部、背面渦状文)は東北大学蔵。注(11)参照。